

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531084

研究課題名(和文)女性の貧困予防策としての教育のあり方に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Research on the Role of Education as a Poverty Prevention Measures for Women

研究代表者

西尾 亜希子(NISHIO, Akiko)

武庫川女子大学・教養部・講師

研究者番号：20550627

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：女性の貧困予防策としての大学における教育のあり方について実証的に研究することを目的とした。女子大学生の金銭感覚についてライフイベントとの関連から面接調査を実施し、貧困のリスク要因を探った。その結果、貸与型奨学金を受給する女子が増加する一方、結婚や出産への関心が強すぎ、返還義務が希薄な者が目立った。対照的に商・経の女子は奨学金を借りている場合に限らず、金の管理能力が高い傾向が見られ、多くは身近な人からリアリティのある金にまつわる話や金の管理能力の重要性について学んでいた。結婚や出産により稼得能力を失いやすい女性にはこれらの女子が受けてきたような教育を公教育で与えていく必要があることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to find what kind of education can play a role as a poverty prevention measures for women. To explore the risk factors of poverty, monetary sense of female university students were examined through conducting interviews from the context of the life events. As a result, while the number of female students who receive a loan type scholarship increase, their strong interests in the marriage and childbirth decreased the sense of obligation to return money. In contrast, female students in commerce and economics seemed not only be interested in money, but also good at money management: many of them had learned how important money management was at home. it is necessary to provide women with the education like the one those in commerce and economics had received in public education in order to prevent women in general from falling in a poverty.

研究分野：教育社会学

キーワード：女性 貧困 予防策 ジェンダー ファイナンシャルリテラシー

### 1. 研究開始当初の背景

従来の貧困に関する研究は、貧困に陥っている人々の出身階層、学歴、ジェンダーなどの属性やそれらによる貧困の度合いについて検討を行うといった現状分析を中心とするものや(例えば青木 2003、橋本 2008)、貧困に陥ってしまった人々に対する雇用政策や社会保障制度のあり方について検討を行い、提言を行うもの(例えば庄司 1997、神原 2007)が主流であった。確かに貧困に陥ってしまった人々に対する「事後的な対策」は常に不可欠であっても、財政や景気の変動の影響を受けがちである。また、貧困に陥る人の数を根本的に減らすことにはつながらないという点において課題がある。本研究では女性が貧困に陥る前の「事前的な対策(予防策)」について検討することにした。

### 2. 研究の目的

女性の貧困予防策としての大学における教育実践のあり方について実証的に研究することを目的とした。まず女性が生涯にわたって直面するリスク要因について明らかにするため、先行研究の整理を行い、次いで大学生の金銭感覚について、就労、結婚、出産、理想の子どもの数、老後の生活など生涯におけるライフイベントとの関連から面接調査を実施し、理想の生活と現実とのギャップについてジェンダーと経済的な観点から検討し、貧困のリスク要因を探った。その上で、英国におけるパーソナル・ファイナンス教育を参考に、女性の貧困予防策としての大学における教育のあり方を検討した。

### 3. 研究の方法

男女の奨学金を含むパーソナル・ファイナンスと就労、結婚、出産、理想の子どもの数、老後の生活などのライフイベントを含むキャリアの捉え方の違いおよび専攻分野での学びによるそれらの変化の有無を調べることにより、貧困のリスクを生じさせる要因を突き止め、どのようなタイプが生涯にわたって貧困のリスクに陥りやすいのか、特に女性の場合どうなのかについて明らかにすることにした。

そのため、関西の共学大学2校、女子大学1校の1年生から4年生(男子18名すべて商学・経済学部、女子18名商学・経学部、20名商学・経済学部以外の計56名)に対し、2013年11月から2014年2月にかけて面接調査(半構造化面接)を実施した。合わせて、彼らの基本的属性、奨学金受給・授業料免除の状況、金融・経済教育受講歴等に関する質問紙調査も実施した。調査対象者は、調査者の知人の教員・学生を通じて調査協力者募集のピラを手渡しやメールで配布し、17名を集めた後、彼らが所属するゼミ、部活、サークル、寮等の知

人を紹介してもらいスノーボール・サンプリングを用いた。

### 4. 研究成果

主な研究成果は二点ある。一点目は貸与型奨学金の受給および返還をめぐる女子学生(女性受給者)の意識と貧困リスクの関係を明らかにしたこと、二点目は商学部・経済学部の女子からパーソナル・ファイナンス教育のあり方に関する示唆を得たことである。

#### (1) 貸与型奨学金受給および返還について

##### 貸与型奨学金受給の現状

調査時点での貸与型奨学金受給者は56名中18名(32.1%)であり、受給月額額は、3.0万円4名(すべて女)、5.0万円7名(男4、女3)、5.4万円1名(女)、6.4万円1名(男)、8.0万円4名(男1、女3)、10.0万円1名(女)であり、一人あたり平均5.6万円(男5.7、女5.5)であった。「平成24年度学生生活調査」(日本学生支援機構2014)では、大学学部生(昼間部)の52.5%が奨学金を受給、受給月額は3.4万円であることと比べると、本調査の対象者の場合、3大学が兵庫県や大阪府の都市部にあり、学生生活費が高くついていることの影響を考慮する必要があった。

##### 奨学金の返済の自信の程度

「自信がない」0名、「あまり自信がない」2名(ともに女)、「やや自信がある」7名(男3、女4)、「自信がある」9名(男3、女6)であった。就職が決まっている学生が5名(男3、女2)いたこともあり、そのうち4名(男2、女2)が「自信がある」と回答した。一方、所属する部活動でアルバイトが一切禁止されており、一度もバイトしたことのない学生や就職浪人を決めた学生が返済の自信を示すなど、注意が必要な回答がみられた。

##### 借入金を返済する方法への関心の程度

「関心がない」2名(男1、女1)、「あまり関心がない」4名(男1、女3)、「関心がある」7名(男2、女5)、「かなり関心がある」5名(男2、女3)、「とても関心がある」は0名であった。貸与型奨学金を受給している18名中6名が「(あまり)関心がない」と回答した。(面接調査では「ローンを組んでも」戸建てを持つことを希望する学生が少なくなかった。)奨学金が「借入金」であり、返済する必要があるという意識が希薄な学生がいる可能性が示された。

##### 貸与型奨学金受給の要因

#### <1> 経済的困窮

「経済的困窮」に関する回答は11名(男4、女7)と最も多かった。父親についての

発言が多く、収入が少ない、賃金が低下した、仕事が不安定、金遣いが荒い、借金がある、定年退職した、廃業したなど、その内容からも困窮ぶりが明らかであった。兄弟数が多いため、教育費がかさむ、母子家庭で母の収入が少ない、両親共働きでも収入が少ない等、経済的理由に関する回答も目立った。

#### <2> 親への申し訳なさ

「親への申し訳なさ」に関する回答 10名(男 2、女 8)は先に述べた「経済的困窮」に関する回答とほぼ同数であったことは注目に値する。大学進学以前にすでに私学に通わせてもらったり、塾に行かせてもらったりしていたので、「親にお金を使ってもらったのが本当に申し訳ない」(奨学金を受けていなかったら親への)申し訳なさは増えてたと思うんですけど」など、「健気な子ども」の姿がみられた。

#### <3> 返還のしやすさ

第2種奨学金の広がりにより借りやすくなったため、経済的にひどく困窮しているわけではないが、借りられるから借りており、生活費に困った場合の補てんに使用したり、貯まった分は繰り上げ返済する予定という学生もいる。また、「月2万って、ちょっと大きいけど、無理ではないかな」、「月々2万ずつ払えば、20年で払うんでしたっけ?何か忘れちゃったけど」という発言に見られるように、返済月額が少ないことが受給を促している側面もある。

#### <4> 返還する意志はあるのか

返還の意志の有無については男女ともに強固な性別役割分業観が影響していることが示唆された。男子6名が仕事を優先し、主たる稼ぎ手になりたいと考え、妻には家事・育児を優先してほしいと願っていた。奨学金は自身で返還しつつ、家族を養う意向を示した。一方、女子10名も専業主婦または家事・育児優先願望を示し、就業継続よりも家事・育児に関心を示した。奨学金の返還については可能であれば夫に返還してもらいたい、成り行きに任せるなど、返還義務の希薄さが目立った。その傾向は特に商学・経済学以外を専攻する女子に顕著に見られた。

#### <5> 貸与型奨学金の返還に関する課題

奨学金受給者には、奨学金の額の大きさや返済義務についての自覚が希薄な傾向がみられた。家庭では子どもの前でお金の話はタブー視されているため、学校では時間的制約や専門的知識を持つ教員の不足などの問題があるため(金融経済教育を推進する研究会 2013) 学生らは十分な金融経済教育を受けないまま、奨学金という「借

入金」を受給している。奨学金制度のあり方およびその周知の仕方の見直しと同様、家庭や学校での金融経済教育のあり方(ネーミングや内容も含めて)の見直しが必要なのではないか。さもなければ、返還義務に対する自覚が希薄なまま安易に借入してしまう学生が後を絶たず、特に生涯賃金が低くとどまる傾向にある女子学生が結婚の夢を果たせなかったり、果たしたとしても借入金を背負い続けるとなるとすればその心理的負担は計り知れないものになる。そもそも男性の場合は、結婚をして家事・育児に専念したいと考える者はほぼ皆無で、家事・育児のために返還義務を放棄したいという誘惑にかられることさえ許されない状況であり、男性であるがゆえの心理的負担が大きい。さらに、返還金を回収できない日本学生支援機構も多大な不利益を被ることになる。そうであるならば、貸与する側の日本学生支援機構も、借入する側の学生も、手続きに入る前に返還計画を明らかにし、返還のシミュレーションを定期的に行うなどの機会を持つことによって、学生側が借入額について後で慌てないですむあるいは返還義務に自覚的になるシステムを構築する必要がある。

#### (2) 商学部・経済学部の女子に学ぶパーソナル・ファイナンス教育のあり方

##### 株式や債券等への関心の程度

専攻分野に関わらず、家族(親や祖父母等)が株式や債券を保有し、それらを売買している学生は、総じて親近感を持っており、将来保有することへの関心を示した。特にそのような家族を持つ学生は商・経女子に多かった。また、商・経男子2名は、実際に自分名義の株式を保有した。

一方、家族が株式を保有しない場合、無関心を示す傾向が見られ、特に商・経以外の女子の場合、嫌悪感や怖れを示す傾向が強かった。

##### 進学動機

商・経女子の場合、家族(母親や姉)や親戚(おじや父のいとこの女性)が「バリバリ」働いていて「カッコよく」見え、「株式を保有」したり、「好きなものを自分で買って」、「自由な生活」を「楽しんでいる」ように感じたり、商・経に関わる知識を受けた高校時代の恩師等に憧れている者が多く、それらの人々が彼女らの「ロールモデル」になっていることがうかがわれた。また、日常の経済生活における不便さや疑問が彼女らを商・経進学への強い動機づけとなっていた。一方、ジェンダーにかかわらず、「国立大学が第一志望だったが、受験で失敗した」や「数学が得意だった」等の理由から「ネームバリューがある大学で、かつ数学の知識を活かせる経済学部」に進学することにした学生もいたが、その傾向は

特に男子に見られた。さらに、男子の場合、「商・経が就職の際に有利または無難と考えた」者が多かった。

#### 専攻分野での学びによる変化

ジェンダーや学年にかかわらず、「就職後には何かで役立つだろう」と期待する学生も多かった。また、下級学年では「(商・経に所属して)専門知識を得たという実感はまだない」という学生が多かった。一方、上級学年の女子には、これまであいまいに理解していた商・経に関わる様々な事象について、「知識を得たことによってより理解が深まった」、「政治・経済がさらに面白いと思えるようになった」、「(株式の変動等を含めて)新聞を読んだり、ニュースを観ることが増えた」等、商・経での学びが実生活に活かしているとする者が多かった。

#### パーソナル・ファイナンス教育のあり方への示唆

株式や債券等への関心については、家族や親戚等が身近な人々がそれらを保有し、売買しているか否かが、進学動機については、商・経女子の場合、依然として男性中心のそれらの分野に進学を促すロールモデルの存在や経験の有無が、専攻分野での学びによる変化については、変化を感じられるほどに学んでいるか否かの他、進学動機が当該分野で学ぶ内容にどの程度直結しているかが、それぞれ強く影響をしていることがわかった。「親近感」のような個人が持ち得る文化資本の格差を是正するのは容易ではない。しかし、方法としては学校におけるパーソナル・ファイナンス教育が考えられる。その際、株式や債券だけでなく、ローン等についても「親近感」を持たせるような教育内容にすることが重要である。またからは、株式や債券を実際に運用している人や経済的自立を果たしている人等に授業に関わってもらい、学びに「リアル感」を持たせる方法の有効性が示唆される。特にこの方法はロールモデルが少ない女子には有効かもしれない。貸与型奨学金を含むローンを組んでいる疑似体験を採り入れたり、実際にローンを組んでいる人に話を聞いたりするののも一つの方法だろう。そのような取り組みによってに見られたような学びによる変化が起きることを期待できる。

#### <引用文献>

青木紀、明石書店、現代日本の「見えない」貧困 - 生活保護受給母子世帯の現実、2003

神原文子、ひとり親家族と社会的排除、家族社会学研究、18号.2巻、2007、11-24

庄司洋子、有斐閣、ひとり親家族の貧困、

庄司洋子、藤野正之、杉村宏編著、貧困・不平等と社会福祉、1997

橘木俊詔、東洋経済新報社、女女格差、2008

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

松並知子、西尾亜希子、女子大学生のキャリアプランと進路選択に対する自己効力、経済的自立志向、基本的信頼感との関連、日本心理学会第77回大会発表論文集、2013、1229 (査読あり)

Nishio, A., Matsunami, T. Career Planning from a Financial Perspective: An Investigation into Female Students' Attitudes to Work, Family and Money, The Journal and Proceedings of GALE, Vo.5, 2012, 38-58 (査読あり)

〔学会発表〕(計4件)

西尾亜希子、商学部・経済学部女子に学ぶパーソナル・ファイナンス教育のあり方、日本教育社会学会第66回大会、愛媛大学・松山大学(愛媛県・松山市)、2014年9月13日

西尾亜希子、大学生の奨学金受給行動とその要因に関する研究 関西3大学での面接調査から、日本高等教育学会第17回大会、大阪大学豊中キャンパス(大阪府・豊中市)、2014年6月28日

松並知子、西尾亜希子、女子大学生のキャリアプランと進路選択に対する自己効力、経済的自立志向、基本的信頼感との関連、日本心理学会第77回大会 札幌市産業振興センター(北海道・札幌市)、2013年9月20日

西尾亜希子、女性の貧困予防策としての金融教育 諸外国の取り組みから、日本ジェンダー学会、とよなか男女共同参画推進センターすてっぷ(大阪府・豊中市)、2012年9月8日

〔図書〕(計2件)

西尾亜希子他、ミネルヴァ書房、アジアのなかのジェンダー第2版、2015、290(1-17、127-149)

西尾亜希子他、ミネルヴァ書房、アジアのなかのジェンダー、2012、270(1-16、107-129)

〔その他〕

西尾亜希子、生活の質を考える ジェンダーの視点から、Pas A Pas、2013

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

西尾 亜希子 (NISHIO, Akiko)

武庫川女子大学・共通教育部・専任講師

研究者番号：20550627